
一緒にご飯を

山野抹茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一緒にご飯を

【Nコード】

N28620

【作者名】

山野抹茶

【あらすじ】

三度の飯より寝ることが好き。
食べることより寝ることが大事。
それなのに……。

その1

前嶋のアパートは、性格が部屋に出ている。モノトーンに統一された室内。埃一つない床。青々としている観賞用の植物。すんだ空気が。清潔感と潔癖感。

統一感のない室内、埃の積もっている床。枯れ果てた植物。淀んだ空気。そんな部屋の住人がこんなところに来ていいのか。この部屋に来るたびに、本当に私なんか部屋に入っているのかと久爾はいつも考える。

「なに突っ立ってんねん、座り」

「・・・ああ、ん」

ダイニングテーブルに携帯電話を置いて、椅子に腰かける。テレビがみえる方が前嶋の指定席だ。と、いうのも、テレビニュースに見入って着がうごかない久爾に「お前の席はこっちに移動やな」と前嶋が言ったからだ。「ご飯のときは、ご飯に集中し」と、言うのが前嶋の言い分だ。

前嶋がテーブルの上に今日の晩御飯を並べて行く。あさりの蒸し焼きと、豆腐、白いご飯。最後に野菜にサーモンがのった料理が出てきたので、久爾は顔をしかめた。

「サーモンのカルパッチョや、サーモンと一緒に野菜を食べ。好き嫌いはあかん。」

最近、前嶋は必ず食事の中に野菜料理を一品入れてくる。久爾が野菜を嫌いだと知ったからだ。「子供か」

わりと食事のマナーに厳しい前嶋は舌も肥えているらしく、また久爾に食事の度に評価を求めてくる。自分が作った料理を客観的に評価することと、久爾が食べて感じることは違うらしい。もっとも、久爾は味覚音痴で野菜以外はなんでも食べる雑食だから、意見を求められてもあまり前嶋の役に立っているとは思えない。

「ご飯のはじめの「いただきます」、ご飯の終わりの「ごちそうさ

までした」まで、携帯電話は触らなくなったのも、前嶋とご飯を食べはじめたからだ。前嶋は携帯電話も嫌いらしく、本人は家に帰ってくると玄関の下駄箱の上に携帯電話を置きっぱなしで過ごしている。

「わりかしいけるやる、このカルパッチョ」

「うん。」

サーモンはおいしい。極力、野菜を減らして食べているが、前嶋が取り皿に残った野菜を入れてくるから、久爾は取り皿を前嶋が届かないところまで下げた。が、前嶋は百八十センチに近い身長なので、テーブルの端に置いてある久爾の取り皿にさつと手を伸ばし、カルパッチョを盛り付けて「食べ」と皿を突き付けてくる。食事の時間が拷問時間変わったのも、前嶋とご飯を食べはじめてからだった。

「親の敵みたいな目しよらんと、はよ食べえ」

「ご飯を食べ終わって、食器を洗うのは久爾の仕事だ。洗うのは食器だけ。包丁やフライパンはご飯を食べる前に前嶋が洗っている。」

皿を洗い終わった頃に前嶋がお風呂から出てくるので「ごちそうさまでした。おやすみなさい」と言って、久爾は前嶋の隣の自分の家へと帰る。

「ほな、また明日。おやすみ」

その2

前嶋の朝は早く、多分三時くらいに起きています。

前に、朝まで仕事が残っていた事があった。あんまり長い間起きてたからお腹が減ってしまった。冷蔵庫の中を見たが空っぽだったので、久爾は近くのコンビニに行くことにした。そこで買ったものは肉まんとかツプラーメンとお菓子。

コンビニに買い物袋を持って店外に出たら、歩いている久爾と会った。そう、朝の四時だ。前嶋も小腹がすいたのでコンビニで買い物しようとしているのかなと思いつながら軽く手を挙げた。

しかし、久爾を見た前嶋は一瞬顔をしかめると、彼女に向かって歩いてきた。

「おはよう」

「おはよう」と言いながら、前嶋は久爾の持っているコンビニ袋を取り上げた。彼は中身を見ると「何やってんねん」と彼女の襟首をつかんだ。

「お腹が減って買い食いしようと思って」

「なんや、自分四時には起きてんのかい」

「今日はたまたま。たまたまだって。仕事が終わってなかったからこんな時間まで起きてるハメになっちゃって」

前嶋が怒ったような口調でいうものだったので、久爾は早口で自分の言い分を言った。

「前嶋は寝てるだろうし、でも家には何も食べるものがなくて。だからカップラーメン食べようと思って」

「カップラーメンはあかん、舌が馬鹿になるで。」そう言うと、前嶋はポケットから鍵を出してきて「うちに朝ごはんがあるから、それ食べ。」と、鍵を久爾の手に置いた。

「いやだよ。部屋の持ち主がないのに部屋に行くなんて。」

「七時には帰るから、それまで家におって飯食べ。飯だけ持って自

分の家に帰ってもええよ。ただし、七時には俺の家に来ること。ほな、ちよつと仕事してくるから」と一方的に言つて前嶋は仕事に行つてしまった。

「・・・すつげえ。朝四時から働いてるんだ」

久爾はいつも六時くらいに目を覚まして一日のはじまりを呪う。太陽が昇つてこなければいいのにといつも思う。だから、四時に起きて仕事をしている前嶋のことを理解することが出来ない。万が一にも四時に起きてしまったら、なかつた事にして二度寝するタイプだ。

とりあえず、片手にもっている肉まんを食べながら家に帰る。

朝の四時だと、人によつては朝の散歩に行く人もいるらしい。多いのは犬の散歩。いろいろな犬を見ることが出来るから好きだ。

家に帰つてもすることがないので、久爾はアパートの前の花壇に座つてが好きなのは大きな犬で、ポメラニアンのような小さな犬はキャンキャンと吠えるから苦手だ。いまだつて、目の前を通り過ぎて行くポメラニアンにキャンキャンと吠えられている。飼い主は「ダメでしょメロンちゃん」なんて言つてる。あんたの躰が悪いんだろつと心の中で思う。

朝陽が昇る前、小鳥がチュンチュンと鳴いている。もう少ししたら、家の台所に灯りがついてご飯を作り始めるだろう。

システムキッチンに向かう、前嶋の背中はいつもピンと伸びている。野菜を切る速さも一定だ。それはつまり、何を作るのかがいつても明確になつているからか。いやしかし、前嶋はいつも冷蔵庫の中から適当に材料を取り出しているような気がする。適当に作っているような気もするし。けど、中には煮込み料理とか、焼き料理もあるから手がこんでいないわけではないのだ。少なくとも、料理を全くしない久爾に手が込んでいるとかいえないかを評価されるようなことではないと考える。

「自分、何してん」

声のした方へ顔をあげると、前嶋が立っていた。

「……何してんだろ」

「いつから座つとつたんや」前嶋が手を触れながら聞いてくる。

「その様子やったら、メシ食つてないやろ。はよきい」

立ちあがり、先に歩く前嶋の後をのろのろとついて歩く。

「お前、腹へってたんちやうんか」

「うん。」

「なんで部屋入って食べへんねん」

「前嶋がいないのに、部屋に入れるわけないじゃん」

「自分の部屋でカップラーメン食べようとは思わんかったんか」

「前嶋が怒るから、我慢する」

「……お前は子供か」と心底あきれたような声で言われた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2862o/>

一緒にご飯を

2010年10月13日11時25分発行